



Title	開かれた住まいの可能性と住まいの安全性 : 「中津の家(仮)」と「田田庵」を中心に、安定性/ 不安定性を巡って
Author(s)	田中, 悠太
Citation	臨床哲学. 2015, 16, p. 135-146
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51600
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

開かれた住まいの可能性と住まいの安全性

—「中津の家（仮）」と「田田庵」を中心に、安定性 / 不安定性を巡って—

田中 悠太¹

1. 清明寮、田田庵、中津の家（仮）—閉じた住まいから開かれた住まいへ

第1章では、学部生時代に住んでいた「清明寮」、その後友人と共同生活をはじめたシェア・フラット²「田田庵」、そして最近関わっている大阪市中津のシェア・ハウス「中津の家（仮）」における経験の中で、ぼくが住まいについてどのように考えてきたのかを振り返っていく。

1.1. 清明寮と部室

8年ほど前、滋賀の実家から大阪に出てきたぼくは、豊中キャンパスのすぐそばにある「清明寮³」に入居した（その後4年ほど居住）。当時あまりコミュニケーションを得意としていなかったぼくは、これから始まる大学生活にたいする期待とともに、共同生活にたいする不安も抱いていた。実際に入居してみると、しかし、その不安はほとんど杞憂であったことが判明した。“共用スペースを利用するとき以外に他人に出会うことがほとんどなく、“寮生は互いにあまり交流をもたないまま暮らしていた”⁴。はじめのうち、ぼくは同じ階の学生との交流をそれなりに積極的に試みはしたものの、次第に疎遠になっていった。このことは、体育会系のコミュニケーションを苦手とするぼくを安心させはしたものの、同時に寂しさを覚えさせることでもあった。

ぼくが学部生時代写真部の部室に入り浸っており、ときに宿泊することもあったのは、そのような寂しさに起因していたと云えるだろう。当時の写真部部室は毎日のように人が集まっていて、非常に居心地の好い空間だった。居心地の良さというのは、住まいや居場所において、もっとも重要なものの一つだろう。清明寮の個室においても、無味乾燥な空間をいかにして自らにとって居心地の好い空間に変えていくかということに腐心したものである。そこでは、なにをどのように置くのか、それがある程度以上自分の好みに沿っている、ということが重要だった。（いまでは、自らの好みに沿わないものもすくなくあつ

たはずの部室の居心地の好きのほうか、懐かしく感じられるのだが。)

この居心地の好きということの一つの軸として、住まうというテーマ⁵には、学部生時代にも一度取り組もうと試みたことがある。結局卒業論文は別のテーマで書くことになったが、住まうということは、ぼくにとって継続して重要なテーマであり続けた。



2009年2月、明道館の写真部室にて

当時読んだ渡辺武信⁶『住まい方の思想』の序章には、次のように書かれている。

人間は誰しも、様々な具体的状況の中で仕事や政治活動をとるか、マイホームをとるかを選択し、自己の社会性と私性を調整し続けているのである。そしてこういう競合的選択が存在することそれ自身が、仕事や政治活動とマイホーム、つまり社会性と私性が同一の次元にあるものではないことを示しているのではないだろうか。ユートピアならともかく、現実の世界では、どんな政治体制下であろうと、社会性と私性がなめらかに連続している人間などありようはないのだ。⁷

このように社会性と私性とを非連続的なものとしてとらえ、社会性から私性を（もちろん完全にではないにせよ）切り離すためのものとしての住まい（マイホーム）を理想とする渡辺氏の主張に、当時のぼくはおおむね同意していたようである。当時の発表において用いた「シェルター」という語に典型的に現れているように、住まいを基本的に閉じたものとしてとらえていたのである。閉じた、そのなかで私はなに者にも邪魔されない空間。本書において渡辺氏は、住まいにおける「私の場所」の重要性を繰り返し強調している⁸。寮の自室という「私の場所」は、ぼくにとって第一には、そこに引きこもることのできる安全な場所、有限ではあるがその内では限りなく「自由」な場所、としての意味をもっていたと云えよう。

もちろん、ひたすら頑なに自らの住まいを外部から閉じたものとしようとしていたというほどではない。寮の自室に他の人が訪れることは、それほど頻繁ではなかったが、来訪を拒むということは、滅多になかった（むしろ、引きこもっているときこそ、だれかが扉を開いてくれるのではないかと、どこかで望んでいた節すらある）。住まいに他者を招き

いれるということ。これは当時から、住まうというテーマについて考えるうえで、居心地の好さとともに重要な要素であった。来客の準備をし、持て成すことは楽しく、居心地が好いと言ってもらえることは嬉しかった。客を持て成すということに関わる言葉として、「歓待」は当時から気にかけていた言葉であり、後の田田庵においても、つねに頭の片隅で意識され、その実践を試みようとしていたと云えるだろう。

1.2. 田田庵

大学院入学後、しばらくの間は実家から大学に通っていたが、夏ごろから豊中キャンパスの近くのアパートを借りて、写真部の友人Iと2人で住み始め、後に、2人とも姓に「田」の字を含むことから、でんでんあん田田庵と呼ぶことにした。6畳の和室2間をそれぞれの個室（部分的には共用スペースとしての役割ももっていた）とし、ダイニング・キッチン、浴室、便所を完全な共用スペースとしている。シェア・ハウジングに踏み切ったきっかけは正確には覚えていないが、家賃を安く



2011年12月、田田庵共有DKにて（撮影：K氏）

抑えたいが、台所の広さなどを考えると独居用の狭いアパートは避けたいと考えていたところ、Iとの話の中で2人とも転居を考えることが分かり、互いの物件の好みが一致し⁹、2人とも人を招くのが好きだということから話が進んだものと思われる。その後Iが転居し¹⁰、ぼくが1人で、そして文学研究科の友人Gが1人で居住している期間がしばらく続いたが、半年ほど前から今度はGとの共同生活を開始している。

Iと同居していた期間は、共通の友人である写真部の関係者をはじめとし、互いの友人を招くことが多かったため、比較的開いた住まいであり、また、共有スペースをもち、互いの部屋を行き来することも多く、住まいの内部においても、一人暮らしや清明寮での生活、あるいは家族との生活に比べると、「他人」¹¹との間に互いに開いた関係があったと云えそうだ。とはいえ、それはやはり閉じた住まいの延長線上にあったと云える。内と外の境界線は、往来が比較的容易ではあったものの、まったくはっきりしたものとして引かれていた。ぼくたちは主人ホストであり、かれ/かの女らは客人ゲストである。そこに明確な区別を保つ

たまま住まいを開くことは、不可能ではなく、困難とすら云いがたい。しかしおそらく、客人を多く迎え入れるということだけで、住まいを開いたと云えるわけでもない。当時の田田庵は、清明寮の自室と比べれば開いた住まいだったかもしれないが、結局のところ、基本としては閉じた住まいを時折開いていたというのが適当な表現だろう。実際、田田庵においてもぼくはしばしば自室に閉じ籠っており、すくなくとも自室については、清明寮におけるそれとさほど変わりはなく、共有スペースについても、せいぜい二重の壁の間程度に捉えていたというあたりが適当だろう。

I氏の転居後には、3人の友人に毎月家賃の一部を負担してもらい代わりに鍵を渡して、普段からいつでも使ってもらえるようにするという試みを行ったが、(G氏が後に居住者となったが)より開いた住まいとすることにはあまり繋がらなかった。

1.3. 中津の家（仮）

中津の家（仮）¹²は、大阪市の中津で藤野郁哉氏¹³の主催する2階建てのシェア・ハウスである。2階には2名の定住者が専有する個室がある。1階の1室と台所、浴室、便所は、半開放スペースとなっており、宿泊や炊事、飲食などのほか、読書会などにも活用されている。一応所在地は非公開であるが、基本的に入りは自由である¹⁴。ぼくが中津の家（仮）にはじめて訪れたのは、今年の6月で、2階に住む写真部の同期のFに森達也『A』『A2』¹⁵を見に来ないかと誘われたのがきっかけである。そのまま2泊したのを端緒とし、現在では週1～3日の頻度で出入りしている。

中津の家（仮）を知ったことによって、ぼくの住まいに関する考え方に、大きな転換が与えられた。ぼくが田田庵においていくぶんかは試みていた住まいを開くということが、そこではさらに徹底して行われていた。清明寮と田田庵が基本としては閉じた住まいであるのにたいし、中津の家（仮）は、基本として開いた住まいである。いや、開いたというよりも開かれたと表現したほうがよいかもしれない。開いた住まいという表現からは、外部とは明確に区別された内側から住まいを開いて



2014年8月、中津の家の1階（撮影：F氏）

いる主体が感じられるからだ。たしかに、最初に物件を借り、中津の家（仮）を開いた（拓いた）のは藤野氏である。かれと2人の定住者とを内、それ以外を外とする区分も、一応ありうるものではある。しかし、藤野氏は、かれ自身もそのように語るとおり、「主催者」としてスペースを積極的に「運営」することは意図的に避けており、中津の家（仮）の現状を説明するには、かれがスペースを開いているというよりも、かれはスペースが開かれるに任せているという表現のほうがしっくりとくる。2人の定住者は、2階の個室を専有しており、1階の共用スペースについても他の利用者のマナーなどについて苦言を呈することはしばしばあるが、すくなくとも1階については、かれらの立場ももっとも頻繁に利用する者といった程度に留まっており、内側からスペースを開き、外側から^{ゲスト}客人を招き入れる^{ホスト}主人とは云いがたい¹⁶。かれらは、スペースを開かれたものとして受け入れているのであり、来訪を拒むことも、逆に特別な持て成しをすることもしない。中津の家（仮）は、外側からの来訪者にたいして内側から開いているのではなく、内と外という境界線の希薄な多数の利用者たち¹⁷によって開かれているのだ。

田田庵はたしかに、比較的開くことが多い住まいであったが、しかしそれはやはり内と外の境界線をはっきりともっていた。田田庵における「歓待」を、“せいぜいのところ、友人や家族の間での招待やパーティーや祝宴のための時おり身に付ける装身具程度のもの”¹⁸とまで云ってしまいたくはないが、その延長線上から抜け出すことはできていなかったかもしれない。そこでの持て成しは、閉じたものを一時的に開き、そしてまた閉じるということを前提としていた。中津の家（仮）においては、分かりやすく目に見える形での持て成しはほとんどといってよいほどなされない。けれども、一見するところ持て成しと不可分に結びついている「歓待」は、このスペースにこの上ないほど似つかわしい言葉であると思われるのだ。

閉じた住まいと開かれた住まいを比較して、後者のほうがよりよい住まいであるというつもりはない。たとえば、外部から住まいを閉じることによって得られるような安全性の重要性を否定するつもりはない。しかし、すくなくとも現在の日本において、住まいは前者に偏りすぎており、そのことが住まいのもつ可能性を限定してしまっているように思われる¹⁹。異なるかたちの住まい、より開かれた住まいを試みることに、均質化からの逃走線としての可能性を期待できはしないだろうか。

2. 住まいの安全性と安定性 / 不安定性

ここからは、第1章をプリントアウトし、それを傍らに置きながら考えていくことにする。第1章を読み返してみると、いくつかのキーワードが見つかる。コミュニケーション、私性 / 社会性、居心地の好き、歓待……。どの言葉をまず手掛かりとするかしばし迷ったのち、最後の段落に出てきた「安全性」という言葉を選び、第2章を書き始める。

かつてのぼくがそうであったように、多くの人は「住まいの安全性」という言葉から閉じた住まいの像を思い浮かべることだろう。オート・ロック、カメラ付きインターフォン、セコムなどによって住まいを外部からより一層堅固に閉じたもの—まさに「シェルター」のような—とすること。そのような防犯システムによって齎される安全性にたいする関心は、近年ますます高まっている。

ここで安全性という言葉安定性という言葉に置き換えてみても、さほど大きな取り零しは生じないだろう（防犯性という意味での安全性も、外部の脅威が住まいの内部に侵入することにより安定性が脅かされることにたいする防衛力ととらえることができる）。住まいの安定性はそのまま、そこで営まれる生活の安定性へとつながる。「安定した生活」という言葉はそれだけで、大多数の人にとって、安心感を齎すものと考えられる。もちろん、日々の生活はすこしずつ変化していく。けれども、その変化も安定した枠組みを大きくはみ出すことはない。And they lived happily ever after と続けたくなるような安定した生活は、ひとつの理想的な生活である。典型的なお伽話における安定した生活は、放浪や冒険といった不安定な生活のあとに手に入れられる（あるいは取り戻される）ものである。この2つの生活の対において、不安定な生活が脅威や貧窮に曝された危険な生活として描かれるのにたいし、安定した生活は、おおむねのところ、脅威や貧窮から護られた安全な生活として描かれるか、あるいは、描かれることなく物語は終わる。いずれにせよ、安定した生活が詳しく描かれることは少ない。安定しているということは、未来が予想できるということであるからだ。そしてだからこそ、安定した生活は安心を齎すのである。

そのような安定した生活の像は、閉じた住まいにおいて営まれるものとして想定されていると云えよう。閉じた住まいを時折開くにしても、それはいつだれにたいしどのように開くのかを積極的にコントロールすることを前提としている。内側の安定性を乱すものについては、外側に追い出すか、あるいはそもそも内側に入ることを拒むことによって、たいていの場合対処可能だと想定されている。あるいは、束の間の非日常において招き入れ

られた不安定性は、しばしの後には住まいの外側へと送り返され、そしてまた安定した日常の生活が始まる。

実際のところは、そこまでうまくいくことは稀である。完全に閉じた住まいなどありえないのであり、開口部があり、外部との往来がある以上は、不安定性は否応なく内部に侵入してくる。あるいは、内部から不安定性が生じてくることもありうる。

安定した生活という理想像のもとでは、そのような不安定性は修正されるべきものとして扱われ、安定性を保つために金銭や労力が費やされる。安定した生活は、それに見合うだけの価値のあるものだと見做されているのだ。安定した職に付いている人たちについては、住まいもまた安定したものであることが望ましいと考えることは、それなりに納得がいく。また、かれ/かの女らにとっては、そのような安定性を保つための費用を負担することはさほど困難なことではないだろう。しかし、不安定な職に就く人（プレカリアート）たちや学生たちについても、はたして同じことが云えるだろうか？

閉じた住まいにおける生活が、安定したものとして考えられるのにたいし、開かれた住まいにおける生活は、不安定なものとして考えられる。開かれた住まいにおいては、未来についての予想が外れることは、日常茶飯事である。開かれた住まいは、まったく無制限に開かれているわけではないにしても、だれか1人によって内側から開かれているのではなく、“内と外という境界線の希薄な多数の利用者たちによって開かれている”のであり、いつだれにたいしどのように開かれているのかをコントロールすることには限界がある²⁰。内側の安定性を乱すものを外に追い出したりそもそも内側に入れることを拒んだりすることは、さほど困難ではないかもしれない。とはいえ、なにを内側の安定性を乱すものであるかとの判断をだれが下すのかといった問題があるし、そもそもそういった排除が頻繁に行われるならば、住まいはもはや開かれているとは云えないものになってしまうおそれすらありそうだ。そして、閉じた住まいにおいては非日常であった不安定性は、開かれた住まいにおいては日常においても来訪し、滞在しうるのである。

安定こそが安全であるならば、不安定なものとならざるをえない開かれた住まいは、安全ではなく、その反対に危険なものであるということになる。だとすると開かれた住まいは、放浪や冒険といった言葉のもつ危険な響きに魅せられるような変わり者があえて、あるいは閉じた住まいにおける安定した生活のための費用を負担することに耐えられないプレカリアートたちや貧乏学生たちが仕方なく、選ぶものにすぎないのだろうか。たしかに開かれた住まいは、変わり者やプレカリアート、学生などによって選ばれることが多いと

云えるだろう。けれどもかの女/かれらは、危険を怖れない者であったり、危険に鈍感であったり、あるいは危険をやむなく受け入れていたりするわけでは必ずしもない。むしろかの女/かれらは、開かれた住まいには閉じた住まいにおけるそれとはまた別のかたちの安全性があると感じているのである。

かの女/かれらが別のかたちの安全性を、一般に追求される安定性という安全性とは異なる形のそれを、追求するのはなぜだろうか？極端な言い方をすれば、プレカリアートたちや貧乏学生たちにとっては、安定した生活などというものは、もはや1つの幻想にしかすぎないからである。かの女/かれらは、住まいの外部においてつねに不安定性に曝されており、その不安定性は日々住まいの内側へと持ち帰られる。限られた費用をやりくりして生活の安定性を保とうとすることは、無駄な努力とまでは云わないにしても、ほかのものを犠牲にしてまで追求されるべきものとまで云えるかどうかは怪しい。そのような費用をまかなうための長時間にわたる低賃金労働は、割に合うものとは云いがたい。

安定が安心を齎すのは、未来が予想できるからである。その逆に、不安定は未来が予想できないことを意味する。未来が予想できないことは、不安を齎す。それは予想できない未来においてなにか悪いことが待ち構えているのではないかと恐れるからだ。しかし、予想できない未来において待ち構えているものは、なにか好いことであるかもしれない。不安定であることは、不安と同時に希望も齎しうるのである。もちろん、安定していることも、希望を齎しうる。しかしそれは、予想できる未来が好いものであるならば、という前件を伴っている。プレカリアートたちや貧乏学生たちにとって、“絶望するということが、未来についてのごくふつうの考え方になった”²¹とまでは云いたくないが、予想できる未来に希望を抱くことは難しい。

閉じた住まいの内ではほとんど幻想としか云えないような安定性を追い求め、そのため費用を稼ぐために外では割に合わない労働に従事する。このような日常の先に、はたして希望などあるだろうか。閉じた住まいが安全であるのは、その内での安定した生活が、ささやかであったとしても希望につながっているからである。けれども、プレカリアートたちや貧乏学生たちにとっての閉じた住まいの内は、たとえ安定していたとしても貧窮の中で希望を失っていくような場所であり、さらに言えば、安定という幻想に囚われてしまうような場所であるのではないだろうか。

では、かの女/かれらに別のかたちの希望を手に入れる術はあるのだろうか？その答えはまだ定かではないが、しかしおそらく、不安定性に身を任せることの中にある。そして

それは、たんに受動的な諦めを意味するのではなく、能動的に自らを開くこと、あるいは自らが / を開かれるなどと表現するしかないような中動性を意味するのである。それは、安定性とは異なったかたちの安定性の可能性、曖昧な希望があるがゆえの安全性、不安定という安全性の可能性である。この可能性は、まだあくまでもひとつの予感にしかすぎない。しかしそれは、確かな実感を伴った予感である。ぼくは今後、この可能性について、藤野氏らとの実践をとおして、かの女 / かれらとともに考えて行きたい。

3. おわりに

第2章は、田田庵と中津の家（仮）およびカフェ空夢箱²²、カフェ LEAD²³などを行き来するその合間を縫って書かれた。開かれた場であるシェア・スペースは、ともに考えることには向いている場であるかもしれないが、ひとりで考え文章を書くことにはあまり向いていない場である。今後シェア・スペースを拠点としながら、大学院での研究も続けていくにあたって、この問題にどう対処するのが適切だろうか。今回のように、深夜の研究室などひとりになれる場所に移動するという選択肢もあるが、シェア・スペースに身を置きながら書くということも試みていきたい。そのための1つ目の方法は、開かれた場の中に部分的に閉じた場を作るというものである。しかし、もう1つの方法のほうがより好ましいようにも感じられる。それは、書くという行為を開かれた場に合わせていくというものである。たとえひとりで考え書くのであっても、その思考は場が開かれているということに影響されるだろう。さらには、ともに考えながら書くというかたちも試みうる。あるいはそれは、かならずしも同時並行的でなくてもよいのであれば、すでに多少なりともやってきたことなのかもしれない。とはいえやはり、すくなくとも現時点でのぼくにとっては、書くためにはひとりで考えることが必要である。ひとりで考え書いている只中において、他者が現れ思考を乱されることは、ときに肯定しがたい。

たとえば藤野氏も、そのように現れ、ぼくの思考を乱してくる者の一人である。そしてかれは、ともに考えることのみならず、ともにやってみることを促してくることによっても、ぼくの思考を乱してくる。しばしばかれは、来週、明日、あるいはときにはいまから、見切り発車でなにかを始めようとし、それにぼくは巻き込まれる。

計画せず実行する時に実感として思うのが、実行する過程には能動的なんだけど、そ

の結果に対しては受動的なんよね。結果はなるようにまかせるといふか、それだけ大したことはできないんだけど、どうなるかわからないことが希望のような感じ。

これは、第2章への藤野氏からの応答である。かれが住まいを拓き²⁴、そして開かれたものとするのも、その先になにか好いことがあると予想しているからではなく、その先に何があるかわからないことに希望を感じているからなのだ。もっともそれは“のような感じ”と表現されるような、不明瞭な希望なのだが。しかしかれは、たとえそれが敗北終わるとしても、やってみたこと自体においては勝利である²⁵と考えているかのように、次々となにかをやってみようともちかけてくる。そのようにしてかれに、あるいはかの女/かれらに、思考を乱された結果が、この文章なのかもしれない。

ぼくは、不安定の中でともに考え、ともになにかをやってみることに希望を見出しつつあるのだろう。来月移転する田田庵を、閉じた住まいから開かれた住まいへと変えてしまおうと考えている。この試みがうまくいくのかはわからない。ひどい厄介ごとに巻き込まれることになるかもしれない。しかしいまのぼくにとっては、それが逃走線を作ることであるかもしれないと思いつきながら、住まいを開かれたものとし、不安定性に身を任せることが、希望のような感じなのである。

注

- 1 tnk.yuta [アットマーク] gmail.com
- 2 戸建住宅を共有するものをシェア・ハウス、集合住宅の一区画を共有するものをシェア・フラットと呼び分ける。また、ワン・ルームを複数人で共有するものをシェア・ルームと呼ぶ。久保田裕之『他人と暮らす若者たち』（集英社新書、集英社、2009年）34-34頁参照。なおここでは、前2者を各居住者に個室があることをもってして後者から区別する久保田氏の定義は採用しない。その他、久保田氏に倣って、これらの住居の共有をシェア・ハウジングと、そこで同居する人のことをシェア・メイトと呼び、シェアという語は主に住宅の共有を指すこととする。
- 3 台所、浴場、便所共有の男子寮。約13m²の個室（1人1部屋）には、ベッドや机、書棚などが備え付けられている。
- 4 赤坂辰太郎『場を開く』（『臨床哲学のメチエ』vol.21、2014、4-7頁）4頁。同じく清明寮生であった赤坂氏のこのエッセーを読んで、ぼくはいくぶんかの羨ましさを覚えた。

- 5 当時は「住まう」という表現をおもに使っていたのにたいし、いまは「住まい」という表現をおもに使っている理由は、おそらく、「住まう」という語には取まりきらないアクティビティの場となりうるものとして住まいをとらえるようになったからだろう。
- 6 1938年。詩人・建築家・映画評論家。
- 7 渡辺武信『住まい方の思想—私の場をいかにつくるか』、〈中公新書〉、1983年、中央公論社。
- 8 たとえば5頁。
- 9 2人とも物件の古さはさほど気にならず、むしろ釘を打てるといった点を利点としてとらえていた。大きな相違点は、ぼくが洋式便所を好むのにたいし、Iは和式便所を好むといった点ぐらいだったが、この点は他の条件が良かった（台所、駐輪スペースが広いなど）ため、ぼくが譲歩した。
- 10 Iとの同居は、1年に満たなかった。転居の理由は吹田キャンパスの近くによい物件が見つかったからとのことだったが、それ以外にも生活についての考えの違いなどもあったかもしれない。
- 11 シェア・メイトを「家族」ととらえることも可能だが、一般的には、血縁関係や婚姻関係がないため、「他人」としてとらえられるだろう。そもそも、ある種のシェア・ハウジングにおける関係は、「家族」と「他人」（および「親戚」という分類にうまく当て嵌めることができないのかもしれない。
- 12 このシェア・ハウスの呼称は一定していない（「アジト」と呼ぶ人が多い）が、Facebook上のユーザー・ネットワークに倣って「中津の家（仮）」（おそらくいつまでたっても仮称のままである）と呼ぶことにする。
- 13 カフェ LEAD（神戸市モトコー）店主。中津の家（仮）を含め3箇所のシェア・スペースを主催。その他、空夢箱（とくに月曜日のブラック・マンデー）の運営、貧乏人デモなど幅広い活動に携わっている。
<http://eighthundredart.jimdo.com/>
- 14 鍵は、知っている人であれば開けられるようになっている。利用者の総数は把握できていないが、頻繁に見かけるのは10名程度、Facebookのユーザー・ネットワークの登録者数は61名に上る。年齢層は20代がもっとも多く、ついで30代、40代以上は少ない。男女比は7:3～8:2程度である。
- 15 オウム真理教の信者に密着したドキュメンタリー映画。それぞれ1997年と2001年に公開。
- 16 かれらはスペースの運営資金の大部分を担っているため、かれらの発言が、その意図の如何にかかわらず、ほかの利用者のそれよりも力をもちうるという点については、以前藤野氏とF氏にたいし問題提起したことがある。
- 17 利用者とそれ以外という内と外はあるにはある。そしてその境界線を中心的に定めている主体は見当たらないが、なんらかの機構が働いている可能性は十分にありうる。
- 18 ルネ・シェレール『歓待のユートピア—^{ゼウス}歓待神礼賛』、安川慶治訳、現代企画室、1996年（René

Schérer, *Zeus Hospitalier-Éloge de l'hospitalité*, Armand Colin, 1993) 18 頁。

- 19 たとえば、渡辺 1983 においても、前者しか想定されておらず、「適切に閉じた」住まいこそが好ましい住まいとして扱われている。
- 20 だれか中心的な者によって開かれた住まいというものもありうる。しかしそのような住まいは、その中心的な者の決定によりいつでも閉じることができるのであり、いわば「閉じた住まい」の変種であると考えられることもできるだろう。したがって、そのような住まいについては、「開かれた住まい」とは区別して、「開いた住まい」と呼ぶことにする（アサダワタル氏の提唱する「住み開き」などがこれにあたるだろう）。本稿においては、開いた住まいは開かれた住まいと閉じた住まいとの中間に位置し、その両者の特性を部分的に併せもつだろうと述べるに留め、開いた住まいについてより詳しく考えることは別の機会に譲ることとする。
- 21 フランコ・ベラルディ（ピフォ）『プレカリアートの詩』、櫻田和也訳、河出書房新社、2009 年（Franco Berardi, *Precarious Rhapsody: Semiocapitalism and the pathologies of post-alpha generation*, minor compositions, 2009）、132 頁。
- 22 中津の家（仮）から徒歩数分のところにあるコミュニティ・カフェ。オーナーのほか、藤野氏を中心とする数名のメンバーが曜日ごとにローテーションで運営している。とくに、藤野氏が担当する月曜日の Black Monday は、18 時以降 500 円で食べ放題、アルコール飲料も 100 円からという採算度外視の値段設定であり、プレカリアートや学生、NEET、社会活動家、周辺住民などの交流および情報交換、企画発信の場となっている。また、営業時間外もシェア・スペースとして使われていることがしばしばある。
- 23 神戸市の元町高架下商店街にある藤野氏の主催するカフェ。藤野氏が担当しているのは毎週金～日曜日、ほかの曜日については頻繁に変更があり、数名により不定期的に営業されている。自家焙煎コーヒーやビールなどの数点のメニュー以外はカンパ制であり、共同炊事なども頻繁に行われている。2 階では宿泊も可能であり、生活困窮者などのための支援スペースとしても機能している。
<http://leadcoffee.jimdo.com/>
- 24 藤野氏は、今後も新たな物件を探し、開かれた住まいを増やしていこうとしている。
- 25 ベラルディ 2009、35 頁を参照されたい。